

特集 子どもと自然

●出典：「育てる」通巻235号 昭和63（1988）年1月25日発行

心に焼き付いた風景

青木 孝安（財団法人育てる会 理事長）

一、二年間の山村留学を終えて、都会に帰った子どもたちが、夏休みなどを利用して留学地を訪ねることがある。

そんな時、私は、よく、かれらに都会生活の感想をきくことにしている。

都会に帰った留学生たちが、一様に質問されることは、「山村留学」の内容についてであるようだ。

「山村留学って、いったい何なの？ どんなことをするの」といった質問が多いそうである。

そこで、私はたずねる。

「それで、君は、なんて説明してやったの」と。すると、

「田植えをしたり、稲刈りをしたり、山菜をとったり、山道を歩いたり、いろいろな話してやるんだ」

「それで、どうなの」と、私。

「みんな面白そうにきいてくれるけど、本当の意味はわからないと思うよ。山村留学って、稲刈りや、田植えや、山歩きじゃないもん。」

最近では、もう、めんどろから説明しないことにしたの。どうせ、わかりやしないもん」

大要、こういう報告をしてくれる子どもが多い。

当初、私は、体験の無い都会の子どもたちには、理解



がむずかしいであろうくらいにしか考えていなかった。

ところが、最近、留学体験者の子どもが、山村留学は、田植をしたり、稲刈りをしたり、山歩きをしたりと説明しておきながら、けつきよく、そんなことではないんだといっているところに注目するようになった。

かれらは、いつたい、山村留學生生活の中の、何が山村留学だったと言いたいのか。それを知る必要があると思うようになった。

この事は、夏休みなどの活動に参加した子どもたちにもいえることだと思う。

この子どもたちは、活動が終わり、家に帰ってから活動の様子を楽しく事細かに家の人に話すそうだ。確かに、一つ一つの活動そのものが、鮮烈な印象として記憶に残っているからであると思われるが、その子が、喜々として語るその心の躍動のもう一つ奥に、何かがあると思われる仕方がないのである。

山村留學生や、休暇中の短期の活動に参加した子どもたちの作文や会話の中に、以上のべた“何か”へのヒントがあるような気がする。そのいくつかを列記してみよう。

・野沢菜の種まきをした。土を耕やすのは大変な仕事だ。牛糞を手でつかんで土の中に入れた。牛糞はいやなにおいがした。でも、種をまき終って、自分たちの畑をみたら、何本ものウネがきちんとならんでいて気持ち良かった。

・稲刈りをした。稲刈りは腰が痛くなるので大変な仕事だ。疲れたので立ち上がって、あっちこっち見たら、村の人たちも稲を刈っていた。もう、ハザにかけている家もあった。トンボが、空に止まったまま、泳いでいた。

・秋になって、びっくりした事があります。毎日通っている道の、木の葉が、だんだん、赤や黄色になり、そのうちに、みんな茶色になり、ある日、一度に散りました。すると、今まで目立たなかった景色が、いっぱい木の枝の向こうに見えました。木の枝の高い所に鳥の巣が見えました。

・ついに、つばくろ岳の頂上に立った。今までの苦労は、いつべんにふつとんだ。頂上の眺めは、ぼくにとって初めてだ。一生忘れないだろう。

・つらかった思い出は、学校からの帰り道だ。雪の

道を一人で歩いてきた。疲れたので、道の曲がり角で、一休みした。まわりを見まわしたら、何もかも、真白だったのにはびつくりした。

・今、思い出してみると、あんなつらい生活、よくやり通したと思うよ。朝、暗いうちに家を出て、七キロも歩き、帰りも暗かった。今、やれ、といわれてもちよつと自信がないなあ！。

このような、子どもたちの感想を読み返しているうちに、私は、そこに、それぞれ、「風景」が語られていることに気づいた。そうだ、風景なんだ、と思った。この風景というのは、ただ単なる自然の風景という場合の風景とちがって子どもたちが、五感を通して体験によって、周囲の自然情報を、個性的に組織化し、その子の心奥にプリントしたものである。私は、そのように解釈した。

このように、体験を通してその子の心に焼き付いた、自然の風景は、一生、その子の人生の同伴者となり、折に触れ、頭をもたげ、生き方の指針となるのではあるまいか。

子どもの成長期、自然体験を与える事の重要性がさげばれ、誰しも反対する人はいない。だがしかし、何故、それが必要かを明確に説明し、多くの人を納得させ得る論を展開した人はいない。しかし、その必要がどうしてもあると思う。

その一つの入り口が、この体験的、風景論であるような気がする。

八坂村

小6 男子

どこを見ても山々々の大自然
鉄筋のビルはセンターだけ
遊園地なんかないけれど
鳥やヘビ、かえる、まだまだたくさん
数えきれない遊びきれかなーこの一年で
自然のきれいな空気にきれいなわき水
それに都会の庭よりぼくらの畑は大きい
皆で力を合せて畑をたくさん作るんだ

●出典：「育てる」通巻235号 昭和63（1988）年1月25日発行

自然を愛す

——自然は、子供の友であり教師です——

山下 金吾（世田谷区教委社会教育指導員）

現在では、様々の思想や立場の人達が、いろいろな体験や観点から自然保護や動物愛護をとなえています。その意見の多くをよくよく考えてみると、共通して、生物の生活の基盤が失われていくことに対する危機感がうかがえるのです。それも、花の為だったり、鳥の為ではなく、人間の破滅を食止めようとする本能的あがきとさえ思えるのです。

ところで、日本には日本の自然があります。その特長ある自然と、私達の祖先はどう付合ってきたのでしょうか。

これは、日本人の皆が承知しているように、自然を愛し、自然に対応して生きる民族だったのです。自然と人間との調和を重んじるところに、日本文化の価値があると言われるのです。それは、むしろ、人間中心ではなく、自然の中に人間がとけこもうという姿に美

しさがあるということです。今こそ、私達は日本文化の伝統を生かしていくことこそ肝じんだと考えます。それが、子供達のためだと考えるものです。

一、花と子供

小学校の二年生になったA君は、元気な子供です。天真爛漫で、友人にはもちろん皆に好かれました。ところが、母親には無邪気なところがかえって気に入っていませんでした。

A君は、好奇心が旺盛でした。ですから、つい下校にも道草を食うのが常でした。これも、母親には気に入らないことでした。

ある日、わき道の水道道路を帰りました。そこで見つけたのは、可憐に咲くすみれの花でした。A君は、とっさにお母さんに見せようと思いました。飛ぶようにして帰って、家の玄関で意気揚揚と声高に春の花のことを告げ見せようと思いました。喜んでくれると思ったのに、花の件をとりあげないばかりか、宿題のことを問題にし学習に励むことを強く要求するのです。A君は落胆するばかりでした。

人間には、美しい物への憧れの心があります。それは人間の本性です。そして、この心はよりよさを求める心であり向上心なのです。努力する心でもあります。美を探究することは、そのものの価値を認めることです。それは、物を大切にする心にもなっています。

小さく咲いている自然の花に、美を見出し自然の生命力をも感じる子供は、持つているよき本性を伸ばしていきます。

二、動物と子供

Bさんは、小学校の三年生です。心やさしく闊達な少女です。そのBさんには、つがいの十姉妹じゅうしめいがいます。よく馴なれていて、自慢にしています。

今日も学校から帰ると、まっ先に話しかけます。いつもは、足音を聞いても寄つてくるのにどうしたのでしょうか。元氣のない小鳥を見て心配になりました。母親に相談して、小鳥屋のおじさんに見てもらいました。ですが、原因はわかりません。その夜は枕元において寝ることにしました。心配ですぐには眠ることが出来ませんでした。

朝になって、はっと目覚めて小鳥を見ると雄の方が死んでいました。死んだ雄の近くで、まるくふくらんでいる雌はなき悲しんでいるように見えました。

Bさんは、小鳥の心になって世話をしました。小鳥に奉仕することに喜びを感じていました。奉仕とは、自己を犠牲にして他につくすことです。この心は、ともに生きる心です。調和の心でもあります。

Bさんは、生命のあるものが必ず遭遇する死にも直面しました。生命のはかなさとともに尊さに目を開くことが出来ました。それは、自己を大切にすることにつながり、他をも大切にする心の向上にもなります。

小さな小鳥の飼育という勤労を通して、Bさんは多くのことを学びました。悲しさにうちひしがれた後の立ちなおりの大切なことも体得したのです。

三、台風と子供

数年前の、夏休みも終り学校の二学期が始つてまもなくの朝のことです。三三五五登校する子供達は、世田谷通りの並木のえんじゅの葉を踏んで歩いていました。えんじゅの葉は、歩道にも車道にもいっぱい

散っています。葉のなくなった木は、枝までが折れています。昨夜の台風のごきぎを物語っているのです。

私は、子供と一緒に登校しながら台風の話をしました。子供達は、台風の通過について風速あるいは雨量といったことは、くわしく承知しています。ところが、台風の脅威といったことは少しも感じていないのです。それは、強い風も雨も、アルミサッシですっかりガードされた窓や、鉄筋の建物に住む人達は、台風など脅威でないと錯覚してしまうのです。

自然の人間に及ぼす脅威や被害がなくなることとはもちろんよいことです。ですが、自然というものの動きや変化ということについては、子供に正しく把握させておきたいと考えます。科学する心を育てる契機もここにあります。科学的な目で自然を深く見つめるとき、人間の力を越えた強大なもの、あるいは微小であつても人知の及ばないものと数限りない自然から、子供は畏敬^{いけい}の念を育てます。この心を持つことは、正しい判断力とともに思慮深く行為する人間となることです。

自然のおりなす様々のことをしっかりと理解していく

ことは、太陽・空気・水・緑・土といったように人間になくしてはならないものにも着眼し、その恵みに感謝の念を持つものです。感謝の念こそ人間と自然が調和する根本になると思うのです。自然は、いかに多くの糸のあやなす上に成り立ち調和しているかを考えていきたいと思います。

終りに、子供は自然いっぱいの中で生活させることが望ましいと考えます。ところが都市化の進んだ日本の中では、それは思うにまかせません。ですから短い期間でもよいから子供に自然を体験させたいと思います。それがまた、教育の自然でもあると考えます。つまり、人間の性情を重んじた教育、自然の法則にしたがった教育ということで子供の本性をよりよく育てるものです。

きんかんの木

戸田 雅子（東京都）

我が家には、小さな「きんかんの木」が植えてあります。植えた理由が少し変わっています。香りが良く、白い花がかわいいとか、実が成るとかいいうことではないのです。子供達が春になるとアゲハ蝶ちようの幼虫をつかまえて来るこの幼虫のごはんの確保なのです。子供達は、よくこの幼虫を見付けて来ます。そしてこのアゲハちゃん（家ではアゲハちゃんと呼ぶのです。）は、みかんの葉をとて山食べるのです。今までは、道路に生えているのをとったり、ご近所の方に頂いたりしていました。けれど幼虫の数が増えるほどに、葉を集めることが大変になるのです。そうそうご近所の方からも頂けず、時には二十四匹にもなりますと、葉を集めるのは、大変な騒ぎです。私は、ハサミを持って歩き回り、主人も夜にとりに行き、子供にもかごとハサミを持たせとりに行かせるありさまです。

そう言う訳で、我が家に「きんかんの木」を植えた

のです。でもこの木は、まだ小さく、今年も随分集めに歩きました。

この春とつて来た、小さな真珠の様な卵は、家を持って帰った時に殻を破りはじめたばかり、子供達は、ルーペを持ち出し息もつかずに生まれ出るアゲハちゃんを見守っていました。丸い小さな卵から幼虫が生まれてくる様子は、なんとも神秘的で心臓がドキドキします。薄黄色い卵から生まれた一令幼虫は、二、三ミリで真黒ですが、子供達は、「かわいい！」「かわいい！」と連発し、今日はアゲハちゃんのお誕生日だと喜び合いました。

めまぐるしい社会に生活している毎日で、心暖まるひとときでした。

幼虫からさなぎ、そして蝶になると外に帰してやりまます。ある時、公園で蝶をはなしてやると小鳥が蝶をめぐめて飛んで来てパツクとひと飲みにしてしまいました。子供達はとてもおこっていました。自然の中では、ごく普通のことだと話して聞かせましたが、子供達は、とても納得できず不満そうでした。でもいつか自然の厳しさも分かるだろうと思っています。

また、蝶になる瞬間に出会った時は、家中が集まり、息を飲み待ちました。主人は、カメラを持ち出し、子供達は、「がんばれ！がんばれ！」と応援します。さなぎから力をふりしぼり出て来た蝶は、見る影もなく、しわしわなみじめな姿です。でも数分のうちに、アイロンをかけたようにピンとした優雅な蝶になりました。この蝶をにがす時にも、子供達は、大騒ぎです。「元気でね」の大声にアゲハちゃんは、大空へ帰って行きました。

今年も、子供達は、随分沢山の幼虫を蝶にかえし、空へ帰しました。

私は、小学生の頃、二年間千葉の祖母の家で暮らしました。畑の中の一軒家で遊ぶ所は、いつも、海か畑の中でした。春になると今まで寝ていた土が起きたように土のにおいがします。そして麦のあおさ、菜の花のにおいが、そこら中にたちこめます。今もその光景が心の中に強く残っています。

こんなビルの谷間に生活している私たちにも、ほんの少し素晴らしい自然に触れたことを、子供達にも、心のどこかにしまっていてほしいと思います。

夕やけ

小4 女子

夕やけは
草木のつぼみがめざめた時が
一番美しい
一日はたらいっていたお日さまは
さいごのあいさつに
自分の一番美しい所を
見せてくれる
花々を金色に美しくかえる
このすばらしいできごとによって
人々の心は
ゆたかになる

かぶとむし

小1 男子

ぼくが、きろくさんのうちにいるとき、かぶとむしは、いないかなあとおもって、おがくずのやまのどこをほって見たら、かぶとむしの、つのが、によきによきとでてきた。そして、つかまえて、かごにいれました。ぼくは、大よろこびでした。
それはくろかぶのちいさいのでした。そんなにつよくないでした。そのかぶとむしをつよくしたいとおもいました。それは、えんぴつを十ぼんぐらいをいとでひっぱれるくらいのもちからにしたいです。すいかのきれっぱしをかんたんにもちあげるくらいのもちからにしたいです。

再掲載を受けて――

よみがえる風景

赤坂 隆宏（現・山村留学指導員）

「子どもと自然」。私自身、職業柄この文言の傍に常に身を置いている現在。ただ、この職業を選択するに至るまでも、自分の進路選択における命題のように、いつ知れず身体を中心に据えられた大きなテーマでもあった。

私の故郷は宮城県大崎平野の田園地帯。核家族であった我が家だが、両親の実家である祖父母の家もそれぞれ宮城県内の山や川の恩恵を受けながら暮らす地域にあった。ゆえに、幼少期から祖父母の実家を頻繁に訪れては、稲作体験や川遊び、釣りや虫捕り、里山登山など、祖父母や両親、同世代の親戚とともに季節ごとの自然を体感する時間があった。幼少期は稲作作業の傍らでトンボやイナゴ、カマキリなどを追いかけては、泥にはまって何度も助けてもらったこと。春にはあぜ道にカタクリの花、秋にはヒガンバナが咲き、どちらもそっとしておく

べき存在として刷り込まれたのもこの時期。高学年になると稲架掛けの手伝いを一日やり遂げ、一人前として扱ってもらい、お小遣いを手に握らせてくれた今は亡き祖父の優しい笑顔など、稲作に関わった記憶一つをとっても、記憶フォルダにいつしか保存され、ふとした瞬間に音や匂いを伴いながら自動再生される動画のように、当時の記憶が鮮明に蘇る。

今でこそ長野の山村に移り住み二十年、懐かしくも心奥に在り続ける我が故郷の原風景と言えるが、ここまで心象風景として体内に刻まれていることに気が付いたのは、宮城を離れて上京した大学生の頃だった。

新宿区のアパートを借り、地下鉄の駅と大学を往復する都心での生活が始まった。これまで当たり前のように傍にあった自然、求めなくとも迫るように近づいてきた四季の便りはもちろんそこにはなかった。都心に漂う薄い季節感に物足りなさを感じながら、四ヶ月を過ごした後の夏。久しぶりに帰省した際、目に飛び込んできたのは道中の車窓から眺める故郷の田園風景、駅を降り立つと香る土や草の匂い、道端に誇らしげに咲く夏空に映えるひまわりやタンポポ、ヒメジョオン……。これまで当た

り前のように何気なく傍にあったものが、一つひとつ輝きをもって胸に迫ってきたのだった。まるで、探していたいくつものパズルピースが所定位置に収まったかのようになり、求めていた身体感覚が満たされたような感覚となり、家までの道すがら、ふと涙が出そうになったのを覚えていた。

現青木会長の「心に焼き付いた風景」の中で語られている、「子どもたちが語る風景」というのは、五感を通して体験によって、周囲の自然情報を個性的に組織化し、その子の心奥にプリントしたもの」という解釈。そして、「体験を通してその子の心に焼き付いた自然の風景は、一生、その子の人生の同伴者となり、折に触れ、頭をもたげ、生き方の指針となるのでは」という、子どもの成長期に自然体験を与えることの重要性を納得させる上での体験的風景論。それらはまさに、私自身が有り難くも生い立ちの環境の中で体現してきたものと言える。幼少期から自然環境に身を置いた経験から、心と身体感覚に焼き付いた風景の記憶を蓄積できたこと。そして一度当たり前としてあった環境から「離れる」ことをきっかけとして、自分の中に潜在していた自然感覚と価値観が頭

をもたげ、進路の指針となって山村留学の現場へと舵を切ることになったこと。そして今もなお、現場で体験活動を実践する際の原動力となる信念の基盤となり、ふと立ち返る原点となっている。

山村留学を経験した子どもたちが、いつの日かどんな風景を語るのか。心奥に刻まれた体験的風景は、決して即効性のある特效薬ではなく、長い期間をかけて熟成され、人生の節目や大きな舵を切る必要がある際には、価値判断基準の指針となるべく濃縮された一滴となって抽出され、時に羅針盤のような大きな基軸となってくれるものでもあろう。

まだまだ現場検証には時の経過が必要だが、これこそ長い期間をかけ、自分にも、留学生たちにも「子ども期の自然体験」からよみがえる風景や、長期熟成され濃縮された一滴を堪能できる日が訪れることを信じつつ、「子どもと自然」が溢れる今の空間を充実させていきたいと思う。